

黒人小説にみる孤立と連帯(Ⅱ一完)

——ロバート・ジョーンズと

ソロモン・サウンダーズ——

安部大成

4

『そして、私達は雷鳴を聞いた』の主人公、ソロモン・サウンダーズの陸軍入隊前の社会態度はⅠ部第1章に、彼が妻に選んだ女性、ミリィの容姿、肌の色、社会階層およびこの女性の社会態度を通して描かれている。

ミリィは典型的な同化主義者 (assimilationist) であり、ソロモンも極めてこの傾向が強いが、この同化主義者の態度が明確に表明されると、彼は内心苦痛をおぼえる人物である。その原因は、彼女が黒人上流階級の三世代であって、同化主義を生き方に定着させており精神的に矛盾を感じないのに反し、彼は夫に死別した南部貧農の母に育てられ、北部のスラム街へ移住し、勤勉と節約と立身出世主義を生活理念に、中間階級に加わった人物であるため、貧しい黒人階層に対する同化主義者の嫌悪感、階層蔑視に直面するとこれを非常に不快と感じるからである。(後ほどソロモンが貧しい階層の黒人兵達が勇敢に展開する軍隊内反差別闘争に参加していくのは、彼等と同じ階層の出身者として共有する精神的基盤がそこに存在するためである。) にもかかわらず、ミリィと結婚したのは、ソロモンの生活理念が彼女のそれと合致し、彼の異性に対する美的評価にもミリィは合致するからであった。

陸軍に召集され、あわただしい中に送ったわずか数日間の新婚期が終る夜、ミリィはソロモンの容姿と資質をほめたたえて、次のようにいう。

「当り前のことだけど、昇進なさるのですよ。あなたは最高の方で、ハン

サムで、それに人と協調出来る方なのですもの。他の人達のように、黒くて、醜くて、低俗な喋り方をなさる方でしたら、そうはいかないでしょうけ⁽¹⁾ど。」

「すらりとした身体つきで、ハンサムで、薄茶色 (teasing-brown) の肌、それに鋭敏で知性があり、教育もあって、意欲的⁽²⁾で。」

「あなたは幸運な方ね。出世なさるのよ。何も妨げるものはないわ。必要なものはみんな兼ね備えていらっしゃるもの。」⁽³⁾

ソロモンはニューヨーク市立大学で法学を学び、あと一年で卒業する予定である。勤め先の市役所では白人に好かれ、評判がいい。将来、作家になる望みをもっている。肌の色は黒くはなく、魅力のある狐色をしている。彼はミリイと同じ夢を求めて生きているのであった。

「偉大なるアメリカ物語。華麗なる女性との暮らし—機会—成功—名声—好評—富—一家の所有—乗用車—地位。一言でいえば、社会的身分 (status)⁽⁴⁾」を得ることであった。

ミリイは理想の男性、ソロモンを選び、彼は理想の「華麗なる女性」ミリイを選んでこのアメリカ成功物語の一部を実現させているのであった。

ミリイ・ベルフォードの祖父は裕福な白人客相手の運送業で成功し、ニューヨーク市ブルックリン地区の高級住宅街に住居をかまえた資産家であり、父はこの事業を継ぎ、母は野心のある美しい女性である。白人の容姿が優勢に現われた混血黒人の祖母は祖父の死後ベルフォード家の実権を握っていて、ソロモンはこのミリイの祖母に好かれて、彼女と親しくなる機会を得たのであった。ミリイは黒人社交界の花形で、乗馬を楽しむ華麗な生活をしていた。

ミリイの肌は秋の黄色の木の葉のように明るい色をしていて美しく、その容ぼうと肢体は男性用雑誌の表紙に見られる女性のそのように魅力があった。

黒人社会学者、C. エリック・リンカン (C. Eric Lincoln) は *Color and Group Identity in the United States* (1968) で、明るい肌色をしている黒人は、第二次世界大戦後まではその肌色と社会階層が大体合致し、黒人間で比較的高い地位を占めていたので、その肌色だけで価値を持っていた、と指摘⁽⁵⁾し、黒人大学生の女性に対する美的評価の例を掲げている。

「学生は次のような冗談をいう。『肌色の明るい女は社交界へのパスポートだ。ちぢれ毛の肌色の黒い女に列車の発車時刻を教えてやるぐらいなら、肌色の明るい女にセントルイス行きの航空切符を買ってやるよ!』」

第二次世界大戦期の不安定な時期に、悪ふざけの『パスポート・パーティ』が実際、二三の大学キャンパスで催された。このパーティに出席するために、男子学生は彼等が同伴して来た女性の肌色の濃淡を基に課せられる税金(彼女達には知らされていないが)を払うのであった。こうして集まった金で飲食物などがまかなわれ、秘かに『妖精の女王』に選ばれた肌色の明るい女性は『生れつきのパスポート』に選定され、この一組は課税なしに入場出来るのであった。⁽⁶⁾

この明るい肌色が社交界へのパスポートとして評価されるのは白人文化に同化しようとする態度、志向から生ずるが、この肌色を白人社会に入るパスポートとして高く評価したのが、第二次世界大戦後までの黒人中間階級の一般的傾向であったことは、黒人社会学者、E. フランクリン・フレイザー (E. Franklin Frazier) がその著 *Black Bourgeoisie* で明らかにした。

さて、肌色に対する評価の存在は黒人間に肌色の濃淡に関する意識を鋭敏にさせ、濃淡の度合に応じて多数の名称を生んだが、チャールス H. パーリッシュ (Charles H. Parish) の調査によると次のように分類することが出来る。⁽⁷⁾

肌色は明色(light)、茶色(brown)、暗色(dark)の三つに大別され、明色は半白色(half white)から汚れ黄色(dirty yellow)まで8色、茶色は鮮明な茶色(high brown)からチョコレート茶色(chocolate brown)まで11色、暗色は暗い色(dark)からタール色(tar baby)まで6色、合計25色があ

る。

ソロモンの肌色 teasing-brownがどの程度の明るさであるかを知るために、この25色に番号を付して列挙してみると、

1. half white, 2. yaller, 3. high yellow, 4. fair, 5. bright,
6. yellow, 7. light, 8. dirty yellow, 9. high brown, 10. olive,
11. light brown, 12. teasing brown, 13. creole brown, 14. medium brown, 15. brown, 16. brown skin, 17. tan, 18. dark brown,
19. chocolate brown, 20. dark, 21. black, 22. rusty black, 23. ink spot, 24. blue black, 25. tar baby

といった具合で、ミリィがほめるソロモンの肌色は12位にあり、彼女の autumn color, 或は honey color と書かれているから4～7位までのどれかであろう。

明色の肌をしたミリィが茶色の肌をしたソロモンを選んだのは彼の知性、意欲、教育、協調的態度が高収入を約束する地位に達する上で効力を発揮し、しかも肌色は黒色からほど遠いためであるといえる。フレィザーは黒人中間階級の大学教育に対する評価はそれが高収入を可能にし、この収入によってさらに公正と平等を求めようとするところにある、と述べている。⁽⁸⁾

ロバート・ジョーンズはオハイオ州大学で二年学び、恋人のアリス・ハリソンは彼に大学にもどって法学を専攻するよう求めている。また、白人のボーイフレンド、トーマス・レイトンに彼を弁護士になる人だと紹介している。ソロモンも法学部で学んだ人物であり、弁護士は高収入と社会的地位を得る上で早道であり、さらに白人社会における差別との闘争に重要な役割を果たして来たので、この階級が高く評価する、と考えていい。

ソロモンは明るい肌色をした女性と結婚したが、暗色の肌をした人々を、ミリィのように嫌ったわけではない。

彼はちぢれ毛の黒い肌の女性に列車の時刻を教えてやったであろうし、また明るい肌の女性にセントルイス行きの航空切符を買ってやったであろう。

彼は「将来、白人の社交場、ウォルドーフ・ホテルのエンパイア・ルームでダンスを踊り、同時にハレムの社交場、サヴォイ・ホール・ルームで騒ぎ廻る黒人仲間達とも付き合う⁽⁹⁾」決心をしていたから。彼はこの意味で、ロバートと同じく、日和見主義的態度の持主である。

彼はミリアが、教育がなく、知性に欠け、意欲に乏しい人々の事を「他の黒くて、醜い」人達と表現した時、「私達二人も black (黒い、黒人)だよ。」と反発した。この反発はロバートがアリスの邸宅に集った中間階級の若い黒人女性達が、ロサンゼルスに流入する南部黒人をスラム形成分子と批難した時に示す反発と同じである。ロバートも貧しい階層の出身であり、ソロモンも同じであった。

このソロモンの言葉に対して、ミリアはベッドから抜け出し、明るい蜂蜜色の裸体を誇示しながら彼の前に立っている。

「私が黒いって？ ねえ、返事してよ。」

彼女はこの美しい肌色と容姿で、ウォール街の法律事務所の秘書になったのであり、教育や知性と共に肌色は大切な役割を果たす事、また、茶色の肌をし、教育のあるソロモンを夫に選んだのも二人で白人社会に入り、地位を築くためでもあった筈だ、と彼に再確認させる。

「あなたはね、喧嘩腰で陸軍に入隊なさるのじゃないのよ。少くとも軍隊にいる間は、人種問題はお忘れなさい。黒人ではなく、アメリカ人として、戦争に勝つことに専念なさいよ。そしてね、他と同じように軍隊でも昇進の努力をなさいよ。」⁽¹⁰⁾

蜜月は終り、彼は妻の言葉を胸奥に秘め、合衆国陸軍に入隊していった。

注(1) John Oliver Killens, *And Then We Heard the Thunder* (Alfred A. Knopf, 1970), p. 4.

(2) *Ibid.*, p. 4.

(3) *Ibid.*, p. 4.

(4) *Ibid.*, p. 4.

- (5) C. Eric Lincoln, *Color and Group Identity in the United States*, in *Color and Race* edited by John Hope Franklin (Houghton Mifflin Company, 1968), p. 254.
- (6) *Ibid.*, pp. 254, 255.
- (7) Charles H. Parish, "Color Names and Color Notions" in *Journal of Negro Education*, 1946, p. 14, quoted by Jean Wagner, *Black Poets of the United States* (University of Illinois Press, 1973), p. 418.
- (8) E. Franklin Frazier, *Black Bourgeoisie* (Collier Books, 1962), p. 76.
- (9) John Oliver Killens, *op. cit.*, p. 5.
- (10) *Ibid.*, p. 6.

5

第二次世界大戦期におけるアメリカ軍、防衛産業界、一般市民の、黒人兵と産業労働者に対する差別、排外ははなはだしいものであった。自らは民主主義に浴することを拒否され、被差別状態に置かれた黒人は、ファシズムを倒し、民主主義を守る戦争に参加しつつ、同時に反差別闘争を行うという、二つの戦いを展開することになった。

合衆国陸軍は第二次世界大戦中、一貫して黒人兵隔離制度を堅持し、黒人兵を白人将校指揮下の人種隔離部隊に配属し、軍務差別として、彼等を主として補給、建設作業に従事させた。黒人兵は人種差別と軍務差別を軍隊内でうけたばかりではない。大戦中の陸軍訓練キャンプの大部分が、南部経済援助策として黒人差別の激しい南部諸州に設置されていたため、黒人兵は軍と地元住民の双方から迫害をうけた。白人兵、住民、警官による黒人兵に対する侮辱行為、暴行、殺害事件が頻発し、中でも白人憲兵による黒人兵傷害事件は非常に多く、この防禦策に黒人憲兵制が採用されるに到った程である。

しかし、黒人憲兵には厳しい制約が加えられ、武器の携帯禁止、携帯の際の実弾装てん禁止、白人兵逮捕の不許可などで、実質的に黒人兵は白人憲兵の暴行⁽¹⁾に対して無防備状態にあった。1943年8月1日のハレム大暴動は若い黒人女性

を手荒く引き立てて行く白人警官, ジェームス・コリンズ (James Collins) を戒めた黒人憲兵, ロバート・バンディ (Robert Bandy) が, この白人警官にピストルで射たれた事件を発端に生じたものであった。⁽²⁾

合衆国海軍は黒人差別策として, 彼等を炊事, 給食係専用を使うことを方針としていた。真珠湾奇襲攻撃に際し, 4機の爆撃機を撃墜した戦艦ウェスト・ヴァージニアの黒人水兵, ドリィ・ミラー (Dorie Miller) は兵器の操作を許さず, その訓練すら受けていなかった炊事係であった。⁽³⁾

1942年6月, 黒人兵の軍務は修理, 補給作業にまで拡大されたが, 戦闘要員として乗艦することは許されなかった。この修理, 補給作業は危険にして労役の多い性質のもので, 言わば軍務種目の差別策として黒人兵に強制されたものであった。この差別に対して黒人兵のデモ, ハンスト, 軍務命令拒否による抵抗は頻発し, 大規模なものでは, サンフランシスコ湾メアリィ島海軍基地の弾薬庫大爆発事故で300名を越える黒人兵, 作業員が死亡した直後に起った, 250名の黒人兵, 作業員の積み荷作業拒否闘争がある。この闘争で55名が軍法会議で解任され, 8年から15年の重労働の刑に処せられた。しかし, 黒人団体の弁護活動によって刑の執行は猶予された。また, カルフォルニア州ポートヒューネムのルソー訓練キャンプでは黒人兵の隔離と進級停止に対し, 建設部隊員の集団ハンストが行われ, 15名が除隊処分をうけた。⁽⁴⁾

こうした黒人兵の反差別闘争に押され, 軍務種目を拡張すべく, 黒人兵のため, グレートレーク海軍訓練所が開設されるまでになった。

黒人水兵を白人水兵と同じ艦艇に戦闘要員として総員の10%まで乗艦させることになったのは1944年8月のことで, それも補助艦艇25隻に限ってのことである。これが全補助艦に適用されたのは戦争も終りに近い頃で, 海軍の黒人兵隔離制度が廃止されたのは1945年8月, 戦争の終わった月であった。⁽⁵⁾

軍隊内差別の激しさから考えれば, 防衛産業界と工場所在地住民の黒人差別と排外のひどさは多くを語らずとも推測出来よう。

ノース・アメリカン航空会社の社長は「我々はノース・アメリカン航空会社

の工場に黒人を採用しない。黒人採用は社の方針に違反するからだ。」と述べたが、これが防衛産業界の代表的態度であった。そして、1941年1月、フィリップ・ランドロフ (A. Philp Randolph) が防衛産業界の黒人差別廃止を迫って1万名の黒人を動員してワシントンへの大デモ行進を用意するや、政府は仕方なく大統領命令を発令して産業界に黒人採用を要求したが、産業界は作業班を人種隔離し、差別待遇と排外の下に黒人を就労させたのであった。

1943年4月、アラバマ州モビル市の造船所で黒人労働者の採用が決定されると、これに反対する白人労働者達が黒人労働者に集団暴行を加え、同年6月には防衛産業の中心地、テキサス州ビューモント市で、黒人労働者に対する憎悪感の高まる中で、白人女性が黒人労働者に犯されたというデマが流され、白人暴徒が黒人地区を襲撃し、75名以上の黒人が負傷した。⁽⁶⁾

1943年3月、黒人兵の意識調査が行われ、彼等がこの戦争に全面的に協力しているか、と問われた時、87%がこれを肯定した。陸軍当局の要請で、この戦争に参加している黒人の望みと期待を調査したサミュエル A. ストウファー (Samnel A. Stouffer) は、黒人は「戦後、諸権利と社会的特典が増強され、待遇および経済的地位の改善がなされること」を強く願っていたことを指摘している。⁽⁷⁾

しかし、白人一般は黒人の反ファシズム、反差別の二つの戦いに強い反感を持ち、国内の黒人差別との闘争は国外のファシズムとの闘争を弱体化させる利敵行為であり、アメリカ国家に対する反逆行為であると考えていた。⁽⁸⁾

1942年の調査によると、白人の6割は、黒人は満足すべき処遇をうけていると考え、半数以上が諸制度における黒人差別と隔離を当然の処置と判断し、戦後も黒人は従来通りの差別と隔離状態に甘んずるのが自然の習わしであると考えていた。⁽⁹⁾ こうした白人社会の差別態度が、死者34名、負傷者461名を出した1943年のデトロイト人種暴動を生み、ついでハレム大暴動を引き起す要因となった。こうした人種暴動は国外のアメリカ軍基地でも発生し、(J. O. キレンズの『そして、私達は雷鳴を聞いた』の後半で描かれているが) 1943年にオース

トラリアのプリズバン米軍基地では黒人部隊と白人部隊が戦車、装甲車を使って戦闘した。こうした部隊間の武力衝突は南太平洋のコニイ島からグアム島に至る区域でも発生し、1945年12月、グアム島では白人兵による黒人兵殺害事件に怒った黒人兵の一団が兵器庫を襲って武装、警備本部を襲撃すべくトラックで司令部に向った。途中、機関銃で重武装した白人部隊に包囲され、この一団は5年から20年の刑を科せられた。これに対して、NAACPのウォルター・ホワイト (Walter White) を中心とする弁護活動が行われ、1946年1月、拘禁中の36名が釈放された。⁽¹⁰⁾

こうした戦争期の抗争の中で、数は少なかったが、ムーア一団 (The Moors) 鉄の自衛軍団 (Iron Defense Legion)、東方世界反戦行動団 (The Pacific Movement of the Eastern World)、平和行動団 (Peace Movement) などの黒人民族主義団体は親日感情を広げたり、徴兵拒否の宣伝活動を行って連邦刑務所に投獄される者もあった。⁽¹¹⁾

また反戦主義の信条を守り、或は人種差別国の隔離部隊で戦闘することを拒否して入獄した黒人解放運動の著名な指導者には、ベイヤード・ラスチン (Bayard Rustin)、ルイス・ジョーンズ (Lewis Jones)、エリジャ・ムハメッド (Elijah Muhammed) があり、他にはブラック・モズリムのメンバー達が入獄した。⁽¹²⁾

第二次世界大戦中、黒人新聞、シカゴ・ディフェンダー (Chicago Defender) や NAACP の機関誌、クライシス (Crisis) は国外のファシズムと国内の黒人差別に対する戦争勝利、つまり、「二つの戦勝」 (Double-Victory) キャンペーンを展開した。しかし、黒人は W. E. B. デュボイス (DuBois) に代表される見解、「若しヒットラーが勝利を得れば、我々が3世紀以上に渡って獲得すべく苦闘して来た今日までのあらゆる権利は一瞬にして失われるであろう。若し連合国が勝利すれば、我々は自らのために、少くとも民主主義を共有するための闘争を続行する権利を有することになる。」⁽¹³⁾ という見解に立って、国外のファシズムとの闘争に比重を置か、或はジョージ・シェイラー (George

Schuyler) に代表される見解, 「我々の戦争はヨーロッパのヒットラーに対するものではなく, アメリカのヒットラー達に対するものである。」⁽¹⁴⁾ という見解に立って, 国内および軍隊内差別と戦うかのいずれかであったが, 後者の見解に立つ者は自動的に二つの敵と戦うことになるのであった。何故なら彼等は差別と戦いながら戦場で, 工場で戦争勝利のために戦い, 働いていたのだから。

『そして, 私達は雷鳴を聞いた』の主人公, ソロモン・サウンダーズは如何なる戦いを体験したのであろうか。

- 注(1) *Pictorial History of Black America*, Volume II (Johnson Publishing Company, Inc., 1971), pp. 276, 277.
- (2) *Ibid.*, p. 302.
- (3) Langston Hughes, *Famous Negro Heroes of America* (Dodd, Mead, 1958), p. 183, *Pictorial History of Black America*, p. 252 では戦艦アリゾナとなっているが, これは, ヴァージニアの隣で爆沈したと, ヒューズの書で述べられている。
- (4) *Pictorial History of Black America*, pp. 270, 271, p. 273.
- (5) Benjamin Quarles, *The Negro in the Making of America* (Collier Books, 1964), p. 221.
- (6) *Pictorial History of Black America*, p. 300.
- (7) Benjamin Quarles, *op. cit.*, p. 223.
- (8) Richard Delfiume, "The 'Forgotten Years' of Negro Revolution" in the *Segregation Era, 1863—1954* edited by Allen Weinstein and Frank Otto Gatell (Oxford University Press, 1970), p. 245.
- (9) *Ibid.*, p. 243.
- (10) *Pictorial History of Black America*, pp. 269, 270.
- (11) E. U. Essien-Udom, *Black Nationalism* (Dell, 1962), p. 60.
- (12) *Pictorial History of Black America*, p. 298.
- (13) Quoted by William Loren Katz, Introduction, in John D. Silvera, *The Negro in World War II* (ARNO Press & The New York Times, 1969), p. i.
- (14) Richard Delfiume, *op. cit.*, p. 239.

6

ソロモンが入隊して最初の訓練をうけたのはニューヨーク市から100マイルばかり離れたトレントン市近郊のフォート・ディクス訓練キャンプにおいてであった。彼は白人指揮官のもとにある第8班に配属されるが、この班と次のジョンソン・ヘンリ訓練キャンプで出会った黒人兵達は彼と南太平洋の戦場まで運命を共にする者達である。この訓練キャンプで彼と深い関係を持つ人物に、読書に耽けるので本の虫（Book Worm）と呼ばれるジョセフ・ティラー（Joseph Taylor）と上官に迎合して昇進を狙う、昇進のロジャー（Buck Roger）と呼ばれているウィリアム・ロジャー（William Roger）がいる。

ジョセフは陸軍の黒人隔離制度に非常に憎しみをいだいており、機会があれば脱走すると公言する。このジョセフに対してソロモンは次のように所信を述べる。

「若しヒットラーがアメリカを征服したら、黒人は今よりも百倍も悪い状態に置かれるだろう。我々はアメリカ市民だ。それに国は戦争中なのだ。我々を必要としているのだ。戦争からもどれば、我々は皆んなと同じく戦闘に加わったことを忘れさせないようにしようじゃないか。」⁽¹⁾

このソロモンの態度、黒人であることを忘れ、黒人差別を忘れ、アメリカ市民となって国外のファシズムと戦うことに専念しようという現状無視の態度を、他の黒人兵達は、揶揄し、アメリカ国歌をせい唱しよう、と叫ぶ者もいる。ジョセフは「ヒットラーがこの国に上陸するときには、いつでも案内役をつとめてやる。」⁽²⁾という。

ウィリアムは昇進のロジャーと呼ばれるだけあって、軍隊内の差別に眼をおおい、国外の敵に眼を向けるべきだと、ソロモンに迎合するが、彼はソロモンが隠ぺいし、自らもそれに直面することを恥ずかしく感じている本音を平然と表現する。

「お前さん、此奴達を大げさな、勇ましい愛国主義のほらを吹いてごまかしてもいいけど、俺はお前さんと同じ様な人間さ。俺は正真正銘の日和見主義野郎なんだよ。俺もお前さんのように教養があって、研ぎがかかっていたら文句はねえの⁽³⁾のだがな。」

ソロモンは彼の社会態度の最も弱い部分をウィリアムに暴露され、紅潮してこの場を逃げ出すことになる。

このウィリアムが正直に顔色を変えて動揺し、ソロモンが巧妙にこれをかくして平静を保たねばならなくなる事件がここで起る。

整列した黒人新兵を前に白人将校が訓辞し、何か質問はないか、と問うたときである。「反抗の仕方を披露してやるぞ。」とジョセフはソロモンに耳打ちして手を上げる。

彼は、自分達は陸軍に入隊しているのか、と質問する。ボーイスカウトにでも入隊したつもりか、と将校が叱ると、彼は、ルーズベルト大統領は成人男子(men)を陸軍に召集するといった筈だが、この軍隊では黒人兵を未成年(boys)と呼んでいる、私達が子供なら皆んな父ちゃんや母ちゃんのところへ帰えらして下さい、ねえ、お願いです！と直立不動の姿勢でいう。黒人兵の列から大爆笑が起り、彼は隊列の前に引き出される。だが彼は真面目な表情をくずさず、姿勢よく、挙手の礼をする。怒り心頭に発した将校が彼を叱咤するとジョセフはこの将校に注意する。「指揮官殿！貴殿は私に対して返礼するのをお忘れになっています！」黒人兵の列から再び大爆笑が起り、ジョセフは倉倉へ引き立てられて行くのであった。ソロモンはこの兵士の言動に同調出来ない、と考えたが、「この兵士には何かがあった。何か真実なもの、温かいもの、戦闘的なもの、何かうらやましいもの、正直なものが⁽⁴⁾あった。」を否定出来なかった。

この事件があった翌日、彼等はトラックに乗せられ、ソロモンが行くことを最も嫌い、恐れていた南部の訓練キャンプへ移るべく、トレントン駅に向うことになった。

彼等が到着したのは、ジョージア州の南にあるジョンソン・ヘンリー訓練キャンプで、ここで彼等は第55補給連隊、ヘンリー中隊に配属され、ソロモンは、黒人にしては異常に秀れた経歴の持主であるとの理由で中隊書記に任命され、ユダヤ系アメリカ人のサミュエル少尉の下で軍務に服することになる。

彼はこのヘンリー訓練キャンプで、まず昇進の第一歩を踏み出したことを大変満足に思った。ここはフォート・ディックスよりも大きくPX(酒保)もあって、そこには黒人女性達が勤めている。親友のジョセフは早くも女達をみつけ出し、その一人、ファニー・マエ・ブラントン(Fannie Mae Branton)が知的でハンサムなソロモンに関心を持っている事を知らせるが、彼は昇進を目標に軍務に全力を尽す決意であり、美しい妻があり、昇進への努力は妻の期待にも、この戦争を勝利に導くことにも合致するので、この自己充実性をもった彼の心にファニー・マエの事など入り込む余地はなかった。隊内で女性の話が話題になるとき、彼の心にはミリーの声がある。「私の忠告を守って下さいな。態度をよくし、規則に従った行動あるのみです。」⁽⁵⁾

彼がこの中隊で接し、彼に強い影響を及ぼした人物に、ファニー・マエの他にジェリー・スコット(Jerry Scott)とジェームス・ラーカー(James Larker)がいる。

ジェリーは入隊以来、機会ある毎に軍規を破って営倉入りを繰り返し、「陸軍最低の兵士」と呼ばれている。彼はソロモンが中隊書記に任命され、昇進の妨げになるような、いかなる失策も起きぬようにと、緊張して軍務に励んでいるとき、営倉を出てすぐ軍規を破って取り押えられ、中隊事務所に連行されて来る。ソロモンは彼が軍法会議を待つ間、その身柄を保管するよう命令をうける。ジェリーは真面目に軍務に励むソロモンに対し、次のような調子で彼を揶揄し始める。

俺は凶人で、お前さんは看守だ。そのくせお前はピストルの所有すら許されていないじゃないか。お前さんは要領のいい知識人らしいが、少しは頭を使ったらどうだ。お前さんを困らすつもりはないが、その気になりゃあお前さんを

ぶっ倒して、ここからずらかることぐらい簡単なことだぜ。

彼は黒人兵を隔離し、差別している陸軍の軍規そのものを否定すべく、これを片っぱしから破ることによって、実践的に反差別闘争を展開しているのだた。

「補給部隊は軍隊ではない。第一次世界大戦では全補給部隊で一名の死者を出したに過ぎぬ。弾に当たったのじゃない。じゃがいもの袋が頭に落ちて来て死んだのだ。」⁽⁶⁾ こういってジェリィは身体をゆさぶって大笑いする。

タイプライターを打ち、書類を作成しているソロモンは冷やかされ、嘲笑され、揶揄されて、逆上する気持を抑えるのが精一杯で、タイプの打ち間違いが続出する。

昇進目当てに軍規に服従しているソロモンの正体を見破ったジェリィは二等兵の彼を伍長殿！ と大声で呼ぶ。小便がしたい、という彼に身柄保管上同行して行くと、窓から逃げるかも知れぬから一諸に入れと、ソロモンを便所に連れ込んだりしたあげく、逃亡して中隊を大騒ぎさせる。

ソロモンの親友、ジョセフが白人憲兵達の集団暴行に遇い、血まみれになって中隊事務所に入って来るのはこの騒ぎがあつて間もないころであった。彼は黒人兵を軽蔑して、子供 (boy) と呼んだ憲兵に兵士 (men) と呼べと注意したため袋叩きに遇ったのである。

陸軍に入隊した黒人兵に武器の携帯が許されないため、白人憲兵達は自由自在に黒人兵を負傷させる、この事実をどう考えるのか、とジョセフはソロモンに問う。武器をくれ、彼等に報復させてくれと訴えるジョセフに対し、彼が殺されなかった事だけでも幸運だった、と慰めるが、ソロモンの胸にも怒りが湧くのを禁じ得なかった。ジョセフは軍隊内での差別と闘うために死を賭す覚悟であった。彼は反差別の戦いにソロモンが加われば、多数の黒人兵が参加するに違いないと信じていた。ジョセフもウィリアムもジェリィも、そして他の多くの黒人兵達も、教育をうける機会のなかった貧しい階層に属する者達であった。法的知識も組織的抵抗のイニシアチブを取るに足る充分な知識も持たなか

った。だから仲間のうちで、ソロモンは有力な指導者になれる可能性があり、彼等もそれを内心期待していた。反差別の戦いのためなら「あなたの側について、いつでも死ぬ⁽⁷⁾」覚悟だとジョセフは彼の前に泣き崩れる。

中隊事務所の仕事に一段落ついた頃、彼は一日の休暇をもらって、ファニー・マエと外出する。ファニー・マエはNAACPのメンバーで、国外のファシズムと戦い、同時に国内の黒人差別と戦うことが第二次世界大戦期の黒人解放運動の基本路線であると信じている。この彼女の信念に対してソロモンは次のように反論する。「国内でアメリカ人同志が争っていて、どうして敵国を倒せるの⁽⁸⁾だ。」

彼女は彼の考えに驚き、一体敵はどこにいるのかと問う。そして、反ファシズム、反差別の闘争によって自滅するような国は碌な国じゃないとソロモンを批判する。美しいファニー・マエとの議論は楽しかったが、同時に心苦しくもあった。

伍長に進級し、母と妻にその喜びの手紙を出した彼は機会があってファニー・マエの家を訪れる。彼女の父はハイスクールの校長であり、家にはW. E. B. デュボイスの肖像画がかけられている。彼女の母はソロモンの事を娘から聞いてよく知っており、娘の婿のようにもてなしてくれる。彼はすでに結婚している事を明かそうとするが結局は黙っている。彼は知らず知らずの間にファニー・マエに心を寄せるようになっていたのである。彼女はすでに彼を愛しており茶色い肌の彼女は美しく魅力があり、その夜二人は肉体関係を持つに至る。彼は隊へ帰るべく夜道を歩きバス停留所へ向う道中、自らの行為をふり返って見て、身を切られる思いがする。

彼は母の手に引かれ、ジョージア州ドライクリークの赤貧洗う生活を後にニューヨークのスラム街へ移って来た頃の事を思った。その頃、一人の男が訪ねて来て母と暮した。彼の宿題を手伝ってくれたり映画館にも連れて行ってくれた。この人は組合活動をしている人だったが、急に訪ねて来なくなった。母は新しい夫のつもりで家に泊めていたが、彼には妻と三人の子供があることが分

った。ソロモンはこの不幸な経験をした母が可哀相に思えてならなかった。彼にはミリィがいる。そして、ファニィ・マエと関係を持ったのであった。彼は軍隊内ばかりでなく、女性との関係でも日和見主義者であった。それを彼は今回ひどく苦しく感じた。

彼がバス停留所に着くと、満員バスに乗れずに残った黒人兵達が行列していた。白人兵を先に乗せるため、黒人兵は積み残されるのであった。そこへエビンスビル市警のパトロールカーがやって来て、黒人兵達の外出許可証を調べ始めた。白人警官が黒人兵の外出許可証を調べる権限はない。しかし、武器を持った南部警察の黒人兵に対する暴虐に恐れをなしている黒人兵達は不満に思いながらも許可証を提示し始める。一人の静かな黒人兵が、乗車している兵士も調べたらどうだ、と抗議すると警官はピストルに手をかけて、黙れ、と怒号し、黒人兵達を威かす。ソロモンはこの日、外出許可証を持っていなかったのが迷惑だった。白人警官の越権行為に対する怒りは二次的なものであった。だから、この場をうまく逃げ出して、いつか別の日に警官と対決しようとした。ところがその決心を裏切るかの如く、自然に鋭い批判の言葉が口から出た。

「あなた方には我々黒人兵の外出許可証を調べる権限はない。あなた方は憲兵ではないのだ。」⁽⁹⁾

彼は恐しかった。全身に汗が流れるのを感じた。彼の言葉に勇気づけられたのか、黒人兵達が白人警官を取り囲んだ。

警官はピストルを抜き黒人兵達に向けた。バスの白人運転手も腰からピストルを抜いて黒人兵達に向けた。そして、彼等を分散してバスに追い込み、この静かな黒人兵とソロモンを残して発車して行った。二人はパトロールカーに乗せられて警察署へ連行されることになった。彼の傍に坐っている小柄な黒人兵に「お前はこんな厄介な事件にかかわるべきじゃないよ。」といったが、彼に対する尊敬の念、その温かい心、同志感、全身にみなぎる黒人意識に感動してソロモンの眼には涙が湧いて来るのだった。彼はこの時ほど、いい気分になっ

たことは入隊以来なかった。この「静かなる」黒人兵は第11技術部隊、作業班に所属するジェイムス・ラーカーであった。

警察署で署長と警官の権限について話し合っているところへ白人の陸軍大佐が入って来て大佐と警官の逮捕権について口論することになり、nigger(黒奴)と差別言辞を浴びせられたため、ソロモンはこの大佐を殴り倒す。彼は警官達に袋叩きにされた上、この大佐に急所を蹴り上げられて意識不明のまま留置所に投げ込まれることになるが、彼のこの行為は彼のこれまでの社会態度、体制内昇進の志向、戦争に対する観念を一変させるに至る決定的な役割を果たすことになる。

彼は二週間、部隊の病院で治療をうけるがこの間に、彼は国外の敵だけではなく、国内の敵とも徹底的に戦う決意をする。

彼が一瞬にして昇進の道を破壊する行為を取ったのは、感情を暴発させ自制心を失ったためではない。この行為の背後に、ジョセフ・ティラー、ジェリィ・スコット、ジェイムス・ラーカーといった貧しい階層に属する黒人兵達の、反差別闘争のためには社会的地位に伴う諸利益など全く眼中にない、無償の、人間解放の精神に接して、すでに形成されていた差別を容認しない態度が強く前面に押し出されるという事態が生じていたのである。彼は武装した警官達に護衛され、しかも陸軍大佐という強力な権力の地位にある人物の差別言動に対して、身の危険を賭して暴力を加え、これを容認しない態度を示した。大佐の差別言動に対して戦う方法は、法律を学び、教育があり、知性に富んだ彼には他にもあった筈である。それにも拘わらず、社会的に好ましくないとして自ら抑制して来た暴力行為によってこれに対処したのは、体制内昇進を目標とし、社会的地位の上昇によって差別状況から脱しようとする態度をここで葬り去る手がかりを求めたからである。この行為へと彼を押しやった直接の動機は、妻のいることを明らかにせず、彼を愛し信頼する女性、ファニー・マエに対して取った行為の自己批判にある。この自己批判が真実性を帯びたのは、被差別状況の中で、苦難の道をたどりながら彼を養育し、教育をうける機会を作った、

貧しく不幸な母の立場に、ファニー・マエを通して立ちもどって見たからである。母を裏切り捨て去った男と同じ行為を彼もまたする恐れのあること、彼女を母と同じように不幸にする恐れのある行為をしたこと、これを苦悩し、自らの誤ちに対する責任の取り方を真剣に求めることになったからである。彼は汚らしい日和見主義者に終る可能性の強い自分と決別したかったのであった。

ミリィと共有した夢、「偉大なるアメリカ物語。華麗な女性との暮し—機会—成功—名声—好評—富—一家の所有—乗用車—地位」⁽¹⁾の獲得という夢は崩れ始め、彼は国外、国内の敵と戦う人間に変わって行くが、反差別闘争には常にジョセフやジェリィ達が先行し、これに彼がつづくといった形態を取り、また妻ミリィとファニー・マエという二人の女性の問題は彼の心の苦悩となって継続して行く。

彼は病院に入院中、彼の今回の行動を賞賛するジョセフや他の黒人兵の支援を得て、陸軍の黒人差別について大統領に書簡をしたため、仲間の署名をも付してこれを黒人新聞に投稿する。

この書簡が黒人新聞に大々的に報道されると、ヘンリィ訓練キャンプ当局は陸軍の謀叛事件として参加者の取り調べを始めるが、結局はこれに関係した黒人兵に隊内の好ましからざる人物とされたジェリィ・スコット、ジェイムス・ラーカーを加えて合計10名を急ぎ最前線に送り出すことになり、彼等は敵前上陸の基本訓練をうけるべく、カルフォルニア州モントレイ市の近くにあるフォート・オーデ訓練キャンプに送られることになる。ソロモンはファニー・マエに妻ミリィのことを告白し、トラックに乗せられ、キャンプのあったエベンズヴィルの町を去る。入隊して四ヶ月目のことであった。これがI部18章の概略である。

注(1) John Oliver Killens, *And Then We Heard the Thunder*, p. 17.

(2) *Ibid.*, p. 17.

- (3) Ibid., p. 18.
- (4) Ibid., p. 21.
- (5) Ibid., p. 29.
- (6) Ibid., p. 31.
- (7) Ibid., p. 59.
- (8) Ibid., p. 76.
- (9) Ibid., p. 123.
- (10) Ibid., p. 4.

7

Ⅱ部2章は彼等10名の黒人兵が水陸両用作戦隊を組み、敵前上陸の猛訓練をうけるフォート・オーデ訓練キャンプでの白人部隊と黒人部隊の隔離状態、これに対する黒人兵の抵抗と白人憲兵との抗争が中心になる。

Ⅲ部6章は南太平洋での日本軍との戦闘、フィリピン諸島への進攻が描かれる。

Ⅳ部6章はオーストラリア米軍基地での白人部隊と黒人部隊の内乱が描かれる。

ソロモンの仲間は日本軍との戦闘および米軍基地での内乱で戦死し、その間、妻ミリィは男子出産後病死、彼一人が生き残ることになる。

この小説は内乱のあったオーストラリアの街、ブレインブリッジの荒廃した街の一地区の戦乱の跡を巡廻する鎮圧部隊のトラックの騒音を耳にしなが、彼が南部出身の名も知らぬ白人兵と肩を並べて腰を降ろし、この不幸な米国兵同志の流血事件に涙を流すところで終る。

第二次世界大戦後、約18年を経て1963年1月に出版されたこの小説は、この大戦期に反ファシズムと反差別の両面戦争を体験する中で誕生した中間階級の新しい分子の精神の形成過程を描いたが、そこには1960年代初頭の黒人解放運動に見られる黒い力（Black Power）運動の方向、つまり、政治、経済、文化のあらゆる分野で黒人の力を結集し、制度内での黒人の地盤を強固なものに

しながら、白人至上主義の浸透した白人文化と決別し、アフロアメリカ文化の遺産を育成する方向が暗示されている。

ミリィ、ファニー・マエ、そしてジョセフ・ティラーを代表とする黒人兵達、また白人憲兵、警官達の差別行為に敢えて抵抗しなかった他の黒人兵達の白人社会に対する態度と主人公、ソロモン・サンダーズの間をここに整理しておく必要がある。

それには、アメリカ黒人の白人社会に対する態度を調査する上で、黒人社会学者、エドガー G. エプス (Edgar G. Epps) が使用している四つのカテゴリー⁽¹⁾を基に考えてみるのが効果的であるように思われる。(但しこの概念規定には彼のそれに筆者の見解を加えることにする。)

四つのカテゴリーとは、① 同化主義者 (Assimilationist)、② 複民族複文化主義者 (Cultural Pluralist)、③ 民族主義的分離主義者 (Nationalistic Separatist)、④ 慣習的分離主義者 (Traditional Separatist) である。

① 同化主義者 アメリカ白人社会の諸制度への統合、文化的同化、人種の融合を志向し、アメリカ黒人のアフロアメリカ文化および身体特徴のうちアフリカの要素を否定的に、アメリカ白人的要素を肯定的に評価する者。

② 複民族複文化主義者 アフロアメリカ文化を保持しつつ、アメリカ白人社会の諸制度への統合を求め、黒人であると同時にアメリカ人であるという意識を強く持つ者。

③ 民族主義的分離主義者 アメリカ白人社会の諸制度は本質的に白人至上主義的の体質を持つものとしてこれへの統合を拒否し、また白人文化は白人至上主義と表裏一体となって構成されているとして、この文化への同化をも拒否し、アフロアメリカ文化を基盤に独自の諸制度、価値観を確立しようとする者。

④ 慣習的分離主義者 人種関係の現状に対して不満をいだいてはいるが、積極的な社会的行動を取ることはせず、現状に応じた態度を維持する者。

以上をもとに先に述べた人物を分類すると、ミリィは同化主義者、ファニー・マエは複民族複文化主義者 (この主義の代表者にエドガー G. エプスは W.

E. B. デュボイスを上げており、ファニー・マエはデュボイスを尊敬し、その肖像画を家に掲げている）、ジョセフ・ティラー達は潜在的な民族主義的分離主義者（この主義は第二次大戦期には見られず、主として1960年代に入って開花したが彼等をその予備軍的存在と考えることが出来る）、他の多くの黒人兵達は慣習的分離主義者ということになる。

ソロモンの子供を残して彼の妻ミリィが死亡し、彼は再婚の相手にファニー・マエを選び、彼はこれによって同化主義者から複民族複文化主義者に変化するが、この変革をもたらす役割を果たしたのがジョセフ・ティラー達である。

同化主義は第一次世界大戦とロシア革命によって破産した、アメリカを白人のるつぼ（melting pot）と考える、イスラエル・ザングウィル（Israel Zangwill）に代表される主張に代って登場した、ヘンリィ・プラット・フェアチャイルド（Henry Pratt Fairchild）の主唱したヨーロッパ移民のアメリカ化論（Americanization）に類似するものであるが、これが有色人種を除外するものであるばかりかヨーロッパ諸民族の文化を否定する面が強く、ここから生ずる国内の統一性の欠如が懸念され、複民族複文化主義論の提唱されることとなり、特に第二次大戦後に力を持つことになった。これが1950年代の黒人解放闘争の中で民族主義的分離主義に徐々にその場所を譲って行くのは、戦後の白人社会が黒人の第二次世界大戦期の民主主義防衛闘争を評価しないばかりか、強まって行く解放闘争に対して強い拘束を加えるようになったためである。黒人解放運動が白人リベラル派と提携し得たのは、この複民族複文化主義が未だ力を持っていた時期で、この小説に現われるソロモンの上司、ユダヤ系白人のサミュエル少尉と彼の協力関係もこの主義が底流として存在するため成り立っていたといえる。

さて、チェスター・ハイムの『叫んだら、放してやれ』の主人公、ロバート・ジョーンズと J. O. キレンズの『そして、私達は雷鳴を聞いた』の主人公、ソロモン・サッダーズ の差別に対する対応の相異は孤立と連帯を生んだが、それは二人の人間存在の把握の相異によってもたらされたものである。ソロモ

ンは自己をも他者をも歴史的，社会的存在として把握しており，ロバートはこれを孤絶的存在として把握し，マッジ・パーソンとジョーニ・ストッダードに報復し，被害の均衡，加害の均衡に差別からの脱却を求め，失敗したのであった。この人物の相異は作家ハイムズとキレンズの間観，社会観にも由来するがこれに関しては稿を新たにして検討することにした。 (完)

注(1) Edgar G. Epps, Sex Differences in Attitudes toward Black Consciousness and Integration among Southern Black College Students, in *Race Relations*, edited by Edgar G. Epps (Winthrop Publishers, Inc., 1973), pp. 252, 253.